

園生活の中で話される家の行き来話題の機能

倉持清美, 柴坂寿子

(お茶の水女子大学生活科学部)

原稿受付平成9年7月3日; 原稿受理平成10年4月3日

The Function of Reference to Visiting Each Other among Kindergarten Children

Kiyomi KURAMOUCHI and Hisako SHIBASAKA

School of Human Life and Environmental Science, Ochanomizu University, Bunkyo-ku, Tokyo 112-8610

The function of preschoolers communication by preschoolers in relation to visiting each other is examined. Their activities during the 2-year preschool education were recorded on videotape. Studying their chit-chat on the tape, we identified the reference to visiting each other. Data were analyzed from three aspects, that is, a contextual factor, topic-making pattern, and human relations in preschool.

The preschoolers managed to visit each other in various contexts in their free time. By analyzing topic-making patterns, we found that their reference meant a lot more than simply making arrangements for visiting. More often than not, the reference was made in order to show close relations to their peers for instance. It was also used as threat. The reference to visiting each other was influenced by human relations in the kindergarten. The results suggest that the reference to visiting each other is important for preschoolers to maintain good peer relations.

(Received July 3, 1997; Accepted in revised form April 3, 1998)

Keywords: preschoolers 幼児, kindergarten 幼稚園, visiting each other 家の行き来, peer group 仲間集団, communication コミュニケーション.

1. 問 題

子どもたちは幼稚園に入園することによって、空間的に家庭と離れた場に新たな社会的ネットワークの場を持つことになる。この家庭と園という子どもの社会的ネットワークの場の拡大に対して、幼児教育では、しばしば家庭と園との連携の必要性がかかげられている。萩原(1994)は連携を家庭と園との相互支援ととらえて、「幼児にとり園と家庭とが味方として自立への限りなき援助」をすることの意味を強調した。

子どもたち同士の家の行き来について、発達心理学的立場からは様々な研究が行われてきた。たとえば幼稚園に入園する前の子どもたちでも、家の行き来はみられる。けれどそれは親主導で行われることが多く、親のマネジメントが、子どものその後の仲間関係に影響を与える(Ladd and Golter 1988)。入園前の家の行き来が園での友情形成に役立っているという示唆(Howes 1996)もある。また、入園後に子ども自身が

家に友達を誘えることと社会的能力の高さに相関があるという示唆(Ladd and Hart 1992)もある。これらの発達心理学的立場の先行研究では、家で友達と遊ぶ経験、家に友達を誘えることと仲間関係で必要となってくる能力との関連を取り上げているところに特徴がある。

それでは、子ども自身は、家庭から園へという社会的ネットワークの広がりをもどのように受け止めているのだろうか。子どもたちの交友関係の面に焦点を当てれば、子どもたちが園に通うようになることで、少なくとも次の二つの新しい出来事が子どもにとって生じるようになると考えられる。第一に、園での仲間関係が降園後の家庭生活での仲間関係に取り込まれていく可能性である。つまり、降園後に幼稚園の友達と遊ぶことが生じるかもしれない。第二に、それに伴い、園の中で降園後に家で遊ぶ約束をするという子どもたちにとって新たな事象が出現する可能性である。

園での仲間関係と降園後の仲間関係については、幼稚園児の保護者へのアンケートから、次の二点が明らかになった(倉持と柴坂 1994)。第一は、幼稚園生活が進むにつれ、降園後に遊ぶ相手が、兄弟姉妹以外では幼稚園の同じクラスの子どもに収束していく点である。第二は、降園後に遊ぶ相手は子どもの選択を親が承認するという子ども主導型で決められていく点である。これらの結果から、幼稚園という新しいネットワークの場でできた友達が、降園後の活動の場であり、入園前からのネットワークの場である家での活動に取り込まれていくこと、さらにそれが子ども主導でなされることがわかった。

この研究から、子どもが幼稚園内で選択した相手と、降園後に遊ぶという実態が明らかになった。そこで、本研究ではさらに次の二点を明らかにしたい。第一に、園の中で「家の行き来」を巡るマネージメントを子どもたちがどのように行っているのかを検討する。第二に、子ども同士でマネージメントして家の行き来をするという事態が、子どもたちの中でどのような新たな意味をもって立ち現れてくるのかを明らかにする。

第一の点では、園の中で「家の行き来」が子どもたち自身によってマネージメントされているのかどうかを確認し、されているとすれば、園生活のどのような場面で「家の行き来」が取り交わされているのか検討したい。実質的に「家の行き来」のマネージメントが必要とされる場面は、降園時と考えられるが、それ以外のどのような状況で「家の行き来」がマネージメントされているのかを明らかにしたい。

第二の点については、次のように予想できる。ペイトソンらは、「コミュニケーションとは、言語レベルで明白に意図的に行われるメッセージの伝達だけを意味しているのではない。むしろ、人とお互いに影響しあうその全てのプロセスを意味しているのである」(ペイトソンとロイシュ 1951)と指摘している。家で遊ぶことは、実質的には、「私たち」だけで遊ぶことであり、公的な空間である園と異なり、他の子と遊ぶ選択のない場で親密に遊ぶことができる可能性を含んでいる。「家の行き来」のこのような現象面から、「家の行き来」話題も本来のマネージメントの意味から意味が変質している可能性があると考えられる。この点について検討したい。

2. 方 法

(1) 資 料

都内公立幼稚園の2年保育の1クラスを入園時(4歳児)から卒園までの2年間にわたって調査した。

本研究の対象クラスは、入園から卒園までの2年間、若干の転入転出はあったものの、クラス替えはなかった。また、担任は全期間変わらなかった。

入園当初は、男子11人、女子6人の計17人であったが、卒園時は男子9人、女子11人の計20人であった。この子どもたちすべてを観察対象とした。

観察対象クラスが年少時は、園全体は年少2クラス、年長2クラスの構成であった。年長時は、年少は1クラスに減った。

園バスはなく、すべての子どもが保護者に連れられて徒歩通園をしていた。したがって、子どもたち同士の家は、徒歩で行き来できる範囲であった。

(2) 観察方法

観察は2人で、週に2回、登園から降園まで行った。自由遊び時間には、観察者の1名が子ども1名を中心に約5分間ビデオで行動を記録し、同時にもう1名がフィールドノートに誰とどんな行動を行っているのかを記述した。観察日数の合計は、年少時では81日、年長時では96日であった。

その他の資料として、学期ごとに保護者へ降園後の様子を尋ねるアンケートを実施した。また、月ごとに子どもたちの仲間関係について担任保育者との話し合いの場を設けた。小学校入学後の子どもたちの下校後の様子について、対象の子どもたちが1年生の夏休みに、保護者へ電話によるインタビューを行った。その中で下校後の行き来に関連した部分を参照した。

(3) 分析方法

「家の行き来」の話題とは、「家に来る」「家に行く」など、家の行き来を含む会話とした。自由遊び時間内(片づけも含む)に生じた、そのような会話をフィールドノートから同定した。1名でしか観察できなかった日にはフィールドノートが整っていないため、本研究ではフィールドノートの整った年少時60日、年長時83日の記録を分析に用いた。補足的な資料として、降園時の保育者から保護者へ子どもが引き渡された後の子どもと保護者のやりとりの事例を用いた。

また、収録したビデオから、仲間関係的な側面を数量的に算出した。具体的には、個々の観察時間内に他児各々と一緒に遊んでいる時間を算出し、学期ごとの総観察時間内に他児各々とどれくらいの割合一緒にい

園生活の中で話される家の行き来話題の機能

るかを分析した。本文中で、「一緒に遊ぶことが多い」という記述は、対象となった子ども同士と一緒に遊んでいる割合が、20%以上の場合である。

降園後に誰と遊んだかについては、保護者へのアンケートの回答を資料にした。本文中で、「降園後に一緒に遊ぶ」という記述は、降園後に遊んだ相手として、名前があがっていた場合である。

以上まとめると、「家の行き来」話題の事例を解釈する上で、次の資料を参照した。

〈クラス内の仲間関係の量的資料、月ごとに実施した個々の子どもについての担任保育者との話し合い資料、学期ごとに行った保護者への降園後の子どもの活動についてのアンケート、降園時の保護者と子どもとの会話の事例、小学校入学後に行った保護者への電話インタビュー。〉

3. 結果と考察

(1) 園の中での「家の行き来」話題の出現

「家の行き来」話題の収集事例数は、フィールドノートの整った年少時 60 日と年長時 83 日の中で、年少時 23 事例、年長時 31 事例、計 54 事例であった。

ここでは、まずそのうち「〇〇ちゃんちいっていい?」「〇〇ちゃんちこない?」と誘うあるいは許可を求める、マネージメントに直接関わる事例計 32 事例を取り上げる。自由遊び時間において、マネージメントに関わる「家の行き来」話題は、大きく分けて次の三つの場面で出現した。

① 遊び：何かを作っているとき（製作）や、遊びの中であいた時間（狭間）、遊びから片づけに移った時間（片づけ）に生じた場合、

② 連鎖：他の子どもが「家の行き来」話題を展開した後、「家の行き来」話題が生じた場合、

③ いざこざ：子どもたち同士が、仲間入りや物の取り合いなどでもめているときに生じた場合。

各場面ごとのマネージメントに関わる話題の出現頻度を表 1 に示す。

降園後に遊ぶ約束が、園の自由遊び時間内の様々な文脈で取り交わされていることがわかった。入園以前には、家での遊び相手を親がマネージメントしていたと考えられるが、親のいない新たな社会的ネットワークの場を持つことによって、家での遊び相手を子どもが自分自身でマネージメントしていること、それが自由遊びの様々な文脈でなされることが示唆できる。

表 1. 「家の行き来」話題の文脈的要因と頻度

	遊 び				連鎖	いざこざ	計
	製作	狭間	片づけ	小計			
年少	3	2	1	6	4	1	11
年長	3	13	1	17	4	0	21
計	6	15	2	23	8	1	32

(2) 園の中で「家の行き来」をマネージメントする状況

家の行き来の相手を決めるのなら、それが問題となる降園時にマネージメントすればよいようにも思われる。なぜ降園時以外の様々な文脈でマネージメントが話題とされるのだろうか。この点を各文脈とマネージメントの関連を見ることで、検討する。

1) 遊 び

遊び文脈の中で、次の個々の事例が示すように、前後の遊びの流れや会話と関係のないような形で、「家の行き来」の話題が出現していた。

i) 製 作

事例 1 年長 7 月

おまごとコーナーに男の子が数人いる。てるが漢字で何かを書こうとするとみんなで何かいう。てるがしょうに「これは、何とかいてあるか」という。てるがそばにいるなおとに「今日、なおとんちいっていい?」という。けいじは「俺は行かない」という。てるが「だめ?」となおとに聞いている。

ii) 片 づ け

事例 2 年長 11 月

ホールでブロックの片づけをしている。ブロックを大きなかごに入れている。はるとが「今日、たいちんちいっていい?」という。たいちは手を振ってだめ、という。ほぼクラスの全員が来て、ブロックを片づけている。

iii) 狭 間

事例 3 年長 5 月

まりあとゆりやはウサギ小屋を洗い、その後で手を洗ってハンカチでふいている。まりあが、「今日きちゃだめ?」とゆりやに聞く。家にきてくれないか、ということらしい。ゆりやが「今日?」と聞き返す。まりあは「きちゃだめ?」と再び聞く。ゆりやは「きてもいいと思うけど」と答える。まりあは「どこっていつてるかわかる?」と聞く。ゆりやは「うちんちでしょう、お母さんに聞いてみなければわからないよ」と答える。まりあは「ゆりやちゃん、うちんちきてもいいかな?」と尋ねる。ゆりやは「うちんちくればいいのに、おまごとあるよ」と答える。

製作・片づけの時間は、手がふさがっているが、口

は自由であり、おしゃべりを楽しむ時間にもなっている(倉持と無藤 1992)。遊びの狭間でも、活動がふととぎれたこの時間に、おしゃべりを楽しんでいる子どもたちの様子を目にすることがある。そのおしゃべりの題材として、前後の文脈と関係のないマネージメントに関する「家の行き来」話題が選択されているのは、それだけ子どもが降園後の家の行き来を気にしていることを示していると思われる。

2) 連鎖

周囲にいる誰かが、マネージメントに関する「家の行き来」話題を取り上げると、それに連鎖するような形で、他の子どももその話題を取り上げる場合がある。

事例4 年長1月

自由遊びの時間に、ようたがそばにいたけいじに「今日、けいじんち行ってもいい?」と尋ねる。けいじが「いいよ」と答える。ようたは「わーい、けいじんち、スーパーファミコンもあるの?」と尋ねる。けいじは「そうだよ」と答える。そばにいたはるとが「月曜日行ってもいい?」とけいじに尋ねる。けいじは何か答えるが聞き取れない。

この事例では、ようたがけいじの家に行く話をしていた。その話題を聞いていたはるとも、スーパーファミコンで遊びたくなったのか、自分のいける曜日を指定して、「月曜日行ってもいい?」と自分もけいじの家に行ってもいいかと尋ねる。

誰かが「家の行き来」話題をすると、周りにいた子どもも、自分の降園後の活動を想起すると思われる。そして、この事例のように「家の行き来」話題が他の子どもに連鎖していく。

「遊び」「連鎖」の文脈から、子どもがマネージメントに関する「家の行き来」話題をおしゃべりの題材として取り上げ、また他の子どもがこの話題を取り上げたことを発端に広がっている様子がわかった。ここで子どもたちは、現時点とは関係のない降園後という未来の出来事であるのにもかかわらず、それを現実なものにしようとしてまとめている。このことから子どもにとって降園後の家の行き来は非常に魅力的なものなのだろうと考えられる。

3) いざこざ場面

子どもたちの間で小競り合いが生じたとき、次の事例のように、相手を説得するために、降園後の家の行き来が引き合いに出される場合があった。

事例5 年少1月

けいじがてるやたちと積み木でお化け屋敷をつくっている。そばで見ていたはるとがてるやに「仲間に入れて」という。それを聞いていたけいじは「だめなんだよ」という。

はるとは「けいじの家、行っていいよ」というが、けいじには返事をしてもらえない。

仲間に入れてもらうことをけいじに拒絶されたはるとは、「けいじの家、行っていいよ」とけいじの家に行くことを約束しようとしていた。結局仲間に入れてもらえなかったが、はるとには、家の行き来を約束することが仲間に入れてもらうために効果があると思ったのだろう。

このように、いざこざの文脈では、マネージメント行為としての「家の行き来」話題が、マネージメントという本来の意味ではなく、仲間入りの方略として使用されていた。マネージメント本来の意味からの変質については、さらに二人の子どもの事例をもとに次に詳しく検討する。

(3) マネージメント行為の意味の変質

観察した園の中で生じる「家の行き来」話題を長期的に見たとき、ある時期にこの話題を頻繁にする子どもと、以前と異なる話題の展開をみせる子どもがいた。この子どもたちのその時期の園での立場をふまえた上で、「家の行き来」話題がどのような意味で使用されているのかを検討する。

1) 「家の行き来」話題を頻繁にする子ども

年少のころ、「家の行き来」話題をあまりしなかった「けいじ」は、年長になり、次の事例のように頻繁にこの話題を取り上げるようになった。

事例6 年長9月

みんなの部屋で、たいち・はると・けいじ・てるが一緒にいる。剣を作っている様子。たいちが、ここに何かつけたら、とか、けいじが、玉がないとできないよ、とかいつている。はると・たいち・てるがひとしきり、鉄砲の話をする。けいじは、ソファから身を乗り出して、この様子を聞いている。突然、けいじが「てる、きょううちんちこれたらいくか?」と聞く。てるは「こないにきまつてるじゃない」とこたえる。けいじははるとに、「こない?」と聞く。はるとは「きょうこれん」とこたえる。けいじは「じゃあ、たいち?」ときく。たいちは「お母さんがいいっていったら、いいけどね」と答える。

この事例のように、けいじが、「家の行き来」の約束を取り付けられる子を探して、何人もの子どもに「今日来られるか」と聞く様子がみられた。仲間関係の量的資料から、けいじは年少からてると親密な関係にあり、一緒にいる割合が多いことがわかっている。しかし、年長になると、てるが他の子のことも好むようになった。この時期のけいじの仲間関係は、不安定であるようすが保育者との話し合いからわかっている。また、この時期、時々他の子どもたちの内緒話からは

園生活の中で話される家の行き来話題の機能

ずされたり、一人だけ仲間から外されたりというよう
なこともあった。

こうした園内での仲間関係の不安定さを、彼が降園
後に遊ぶ相手を確保することで解消しようとしたのか
もしれない。ここでは「家の行き来」話題が、マネー
ジメント本来の意味よりむしろ親密な関係を作り出す
ための手段として用いられたのだろう。

2) 「家の行き来」話題の展開が変化した子ども

次の事例のように、年少のころごろは「家の行き
来」話題で積極的に誘われる子どもではなかった。し
かし、年長になると、誘われることが多くなった。

事例7 年少12月

おまごとコーナーに、はると・てる・しょう・ごろう
がいる。片づけになり、みんなで片づけていると、しょう
はてるが家にくることをいう。はるとが「はると君も」と
いう。しょう「はると君も来ていいけど、ごろうはわから
ない」という。しょうが「ごろうは、きていいかな、きて
いいかな」という。

事例8 年長10月

ホールでキングブロックを作っている。てるは、ごろう
を見つけて「ごろうもなかまにはいるか」、ごろうは「う
ん」という。てるがホールに戻り、なおと・はると・けい
じに、ごろうも仲間にはいるって、と報告すると、けい
じが「ごろう、今日、うちくる?」と誘う。ごろうは「い
かーん」と答える。てるは「ごろう、今日うちんちくる?」
と聞くと、ごろうは「いく、あ、やっぱりいけない」とい
う。てる「そうだよな、まだ(聞き取れない)」という。

この事例では、ごろうが年少時には「はるとくんは
きていいけどごろうはわからない」と、家にくることを
曖昧にされている。ところが、年長になると積極的に
仲間入りを勧められた上に、仲間入りした後すぐに、
二人の子どもから家に来ることを誘われている。周り
が、ごろうと降園後に遊ぶことに積極的になっている
様子がうかがえる。

年少の頃は、男の子たちの遊びの周辺で活動してい
たごろうは、年長になると、遊びの中心になって活動
するようになった。仲間関係の量的資料を見ると、事
例で取り上げた時期である年少2学期は、担任教師と
一緒に活動する割合が高かったが、年長2学期はクラ
スで中心的な男の子と一緒に活動する割合が一番高
くなった。それとともに、周りの子どもがごろうと親密
な関係を築くために「家の行き来」話題を用いるよう
になったと考えられる。

以上の個々の子どもの事例からも、「家の行き来」
話題が本来のマネージメントの意味より、親密な関係
を形成するために使用されている様子が読みとれる。

幼稚園ではマネージメント以外の様々なパターンを
持つ「家の行き来」話題が観察できた。このようなパ
ターンから「家の行き来」話題が子どもたちの中でも
つマネージメント以外の意味についてさらに検討する。

(4) マネージメント以外の「家の行き来」話題

マネージメント以外の「家の行き来」話題として、
「〇〇ちゃん、くるんだよ」「〇〇ちゃんちいくんだよ」
と他者に告げる形、「きちゃだめ」「行かない」など家
の行き来の拒否を宣言する形、「〇〇ちゃんちいくん
だよ」と確認する形、の3通りが認められた。総事
例数は、22 事例であった。年ごとの各パターンの事
例数は、表2のとおりである。これらのパターンから
「家の行き来」話題の持つマネージメント以外の意味
を考察する。

1) 他者に「〇〇の家に行く」「〇〇がくる」と告
げる場合

事例9 年少12月

おさむとなおと、廊下でブロックを使って他の女の子た
ちと遊んでいた。女の子たちが教室に入り、なおととおさ
むは廊下で一休みしている。おさむはなおとに「たけしく
んちいく」という。なおとは返事をしないで、ブロックを
おいて、職員室の方に行く。おさむが後を追いかけて、
「たけしくんちいきたいんだろ、俺いくよ」となおとに言
う。なおとは「別にいきたくない」と答えると、おさむは
「俺、お母さんがいいと聞いたんだ」と言う。なおとが教
室に戻ると、おさむも一緒についていく。

仲間関係の量的資料と保護者へのアンケートから、
年少2学期のたけしにとって、おさむとなおとの二人
ともが幼稚園で一緒に遊ぶことが多い子どもであり、
降園後も3人で遊ぶことがよくあったことがわかって
いる。そうした3人の関係があったからこそ、おさむ
はなおとに「たけしんちいく」と告げたのではないだ
ろうか。たけしの家に行くというおさむの発言に対し
てうらやましいと感じるのは、なおと以外にはいない
とおさむが知っていたからこそ、なおとに対してたけ
しの家に行くことを自慢するように告げていたのだら
う。

表2. マネージメント以外の「家の行き来」話題のパ
ターンと頻度

	パターン			計
	他者に告げる	拒否	確認	
年少	5	4	3	12
年長	4	1	5	10
計	9	5	8	22

この事例のように、実際に家に来ない第三者に向かって「家の行き来」話題を話すとき、その相手はそれを聞いてうらやましがするような立場の子どもであることが多い。つまり、「家の行き来」の話題が、家の行き来をする者同士の関係が強いことを第三者に誇示する結果になっていた。

2) 「きちゃだめ」「いけない」などと拒否が宣言される場合

「家の行き来」話題が、拒否の宣言として使われる場合は、次の事例のように自分の要求を相手に受け入れてもらうために使用されることが多かった。

事例 10 年少5月

おさむ・はると・ごろうが遊んでいるところに、「はるとくん仲間に入れて」とひろやがやってくる。はるとにだめと言われる。おさむからも「三人しかだめ」といわれ、ひろやはしばらくみている。そして「おさむくんちいけない、もうずーっと行かない」という。おさむが「いいよ」と答えると、ひろやは「しょうんちいく」という。

ひろやとおさむは、仲間関係の量的資料と保護者へのアンケートから園生活でも降園後でもよく遊ぶ子どもであることがわかっている。ひろやが、最初に仲間入りを断ったはるとに対してではなく、おさむに対して「おさむくんちいけない」と言ったのは、このような関係をふまえてだと考えられる。また、おさむの家に行かないで、他の子の家に行くという表現は、おさむとの関係を絶ち、他の子との関係を作るということを暗に示していると考えられる。つまり、ひろやは仲間に入れないなら親密な関係を絶つと威嚇しているのだろう。このように「家の行き来」話題が、自分の仲間入りの要求を受け入れさせるための手段として用いられていると考えられる。

3) 「〇〇の家にいくんだよね」と相手に確認する場合

すでに約束している相手に、確認するような形で、「家の行き来」話題を持ち出す場合がある。

事例 11 年長10月

てる・なおと・はるとでキングブロックで車を作っている様子。はるとがてるに向かって「てるちゃんちいくんだ、今日、ね」という。てるは「うん」という。再び、車を作ることに戻る。

てる・はると・なおとの3人でブロックの製作中に、突然はるとがてるに確認を求めた。そして、はるとはてるの確認が得られると、また車づくりを続けていた。

年長2学期の仲間関係の量的資料と保護者へのアンケートから、てるとはるとは園生活でも降園後でも一

緒に遊ぶことが多い子どもであることがわかっている。今現在の遊びの楽しさを共有している関係を降園後にも持続できることをはるとは確認しているように見える。

この確認のパターンから、子どもにとって「家の行き来」話題が、当事者間の親密な関係を維持するために持ち出されていることがわかる。

以上まとめると、「他者に告げる」場合は第三者への親密さの誇示として、「拒否」の場合は親密な関係を絶つと脅して相手に自分の要求を受け入れさせる手段として、「確認」の場合は親密な関係を維持する手段として、「家の行き来」話題が機能していた。園内での仲間関係と降園後の仲間関係が、子どもたちの中で連続性を持って捉えられているからこそ、「家の行き来」話題がこのような関係の操作的機能を含有するのだろう。

4. 全体の考察

降園後の家の行き来が、子どもたちによって園内でマネージメントされていることが確認された。さらにこのマネージメントが降園時以外の様々な文脈で行われていることがわかった。様々な文脈で行われているという事実から、子どもたちにとって降園後に家で遊ぶことは魅力的な出来事であることがわかる。

このことは、たとえば子どもたち同士の「家の行き来」の約束が、降園時お迎えにきた親の承認を得なかった場合の、子どもの抵抗からも伺える。次の事例は、降園時以前に「家の行き来」を約束していたけいじとようたが、ようたの母親に医者に行くことを告げられた場面である。

事例 12 年長2月

ようたが母親に、医者に行くのですぐにはけいじの家にいけないと言われ、泣いている。ようたの母が「連れてってあげるから、連れてってあげるから」というが、ようたは母親をパンチする。母親は「ね、だから、いったんかえって」という。そばにいたけいじの母がどうしたのか尋ねる。ようたの母が医者に行かなければならないことを告げる。ようたは泣き続けている。けいじが、ファミコンの話をする。けいじの母が「だからやらないの、(ようたに向かって)ようた君が来るまで見ないで待ってるからね」と話す。けいじも「すぐだよ」とようたに話す。けいじの母が「だから待ってるから、どうせ4時までやらないんだから、ファミコンは、急いで、いってきな」とようたに言う。ようたは、母親と医者に行く。

こうした事例からも、子どもたちにとって、実際に家の行き来ができるかどうかは、大きな関心事となっ

園生活の中で話される家の行き来話題の機能

ていることがわかる。

マネージメントに直接関わる「家の行き来」の話題について、文脈との関連、長期的な仲間関係との関連から検討すると、マネージメントの行為が、その意味を変えている場合があることがわかった。仲間入りなどの要求を通す方略として使用されたり、親密な関係をつくる手段としての意味が強くなる場合があることがわかった。

また、「家の行き来」話題は、マネージメント以外の様々なパターンを持ち、そのパターンが、第三者への親密さの誇示、自分の要求を受け入れさせる手段、親密な関係を維持する手段という、関係を操作する側面を含有することがわかった。

このように、「家の行き来」話題はマネージメント以外に二つの側面を持っていると考えられる。一つは園内での親密な関係を操作することである。もう一つはいざこざなどの園内での相互作用を操作することである。

降園後の「家の行き来」についての話題が、園生活での子どもたちの親密な関係や相互作用を操作する側面を含有しうるのは、子どもたちの降園後の仲間関係と園生活での仲間関係が実際に連続性を持っているという事実を支えられていると思われる。園での仲間関係が降園後の仲間関係に影響を与える側面については、すでに明らかにした（倉持と柴坂 1994）。一方、逆方向の影響、つまり降園後の仲間関係が園内の仲間関係に影響を与える側面については、次に示すようなたとえの事例が示唆を与える。仲間関係の量的資料、保護者へのアンケート、担任保育者との話し合いから、ようたとえの事例は以下のように推移したことがわかった。年少3学期に、ようたはなおとの家の近所に引っ越してきた。彼らが、年長2学期になると、降園後によく遊ぶ関係が形成され、年長3学期になると、園生活でも一緒に過ごすことが多くなった。つまり、降園後に親しく遊ぶ経験が、園生活での仲間関係に影響を与えたといえるだろう。

このような園の仲間関係と降園後の仲間関係の相互の影響は、就学前施設の成立以来、ずっとあったことだろう。しかし、降園後の仲間関係が本園のように、兄弟姉妹以外ではクラスメートに収束していく（倉持と柴坂 1994）状況では、その影響はもっと強くなっていることが考えられる（無藤 1996）。

また子どもたちは、「わたしんちこない?」「ぼくんちきて」あるいは「〇〇んちいい?」というよ

うな表現で、「家」に誘いあっていた。この表現から、降園後の友だちと遊ぶソーシャルネットワークの場は、「家」が中心と考えられる。しかし、子どもの行動範囲が広がり、必ずしも「家」で遊ぶことが必要ではなくなってきたとき、「家の行き来」についてコミュニケーションする行為の重要性は、マネージメントの上からも、そのほかの意味の上からも減少するかもしれない。この研究で対象となった子どもたちが小学生になったとき、保護者に電話による追跡調査を行った。ある保護者は、子どもが家で遊ばなくなったこと、このためにどんな友達と遊んでいるのか把握できなくなったとコメントしている。子どものソーシャルネットワークの場が拡大し、学校・家以外に広がっていったとき、本研究で明らかになった「家の行き来」話題が果たしていた機能が、他のどのような形で充足されていくのかについては、今後新たな検討が必要である。

本研究では、子どもたちの間での「家の行き来」話題を検討することで、その話題が子どもたちにとって魅力的であり、降園後と園生活の人間関係が相互に影響しあっているからこそ、マネージメント以外の意味を含有しうることを考察してきた。しかし、「家の行き来」話題の意味の変質を支えているのは、その他にも、「家の行き来」話題がコミュニケーションされる状況の特異性が考えられる。園という多くの子どもがいる集団状況の中で、降園後の「私たち」で遊ぶという個人的な状況を話題にする。公の空間に私的空間を生み出すコミュニケーション状況自体が、子どもたちの間でマネージメント以外の意味を生み出しているのかもしれない。このことは、「家の行き来」話題以外にも、たとえば、家の玩具、家族の話し子どもたちがする私的な話に通ずるものなのかもしれない。この点についても、今後の研究が必要だろう。

（注：本文中の子どもたちの名前はすべて仮名である。）

本研究に協力して下さった文京区青柳幼稚園の先生方、子どもたち、保護者の方々に感謝いたします。また、一緒に観察しデータを収集するのに協力して下さった竹田好美さんに感謝いたします。本研究は、文部省科学研究費補助金による研究成果の一部である。

引用文献

ベイトソン, G., ロイシュ, J. (佐藤悦子, ロバート・ホスバーク訳) (1951)『コミュニケーション』, 思想社,

- 東京, 4
- 萩原元昭 (1994) 保育力を高める家庭と園の相互支援 (総説), 保育学研究, **32**, 8-12
- Howes, C. (1996) The Earliest Friendships, In *The Company They Keep* (ed. by Bukowski, W.M., Newcomb, A.F., and Hartup W.W.), New York, Cambridge University Press, New York, 66-86
- 倉持清美, 無藤 隆 (1992) 自由遊び場面の製作活動, 保育学研究, **30**, 52-58
- 倉持清美, 柴坂寿子 (1994) 園生活の仲間関係と降園後の仲間関係, 保育学研究, **32**, 36-41
- Ladd, G.W., and Golter, B.S. (1988) Parents' Management of Preschooler's Peer Relations: Is It Related to Children's Social Competence? *Develop. Psychol.*, **24**, 109-117
- Ladd, G.W., and Hart, C.H. (1992) Creating Informal Play Opportunities: Are Parents' and Preschoolers' Initiations Related to Children's Competence with Peers? *Develop. Psychol.*, **28**, 1179-1187
- 無藤 隆 (1996) 制度の下における成長とその専門的支援システムの構築, 『生涯発達心理学とは何か』(無藤 隆, やまだようこ編), 金子書房, 東京, 93-120